

広島県・医療法人社団 玄同会 小島病院

〒720-1142 広島県福山市駅家町上山守 203 番地
http://kobatake.or.jp/

- 理事長・病院長：小島敬太郎
- 設立：1965 年
- 病床数：一般病床：52 床（地域包括ケア病棟）
療養病床：59 床（医療療養病棟）
- 診療科：内科（一般内科）、脳神経内科、
消化器内科（胃腸科）、循環器内科、
呼吸器内科、糖尿病、外科、泌尿器科、
眼科、リハビリテーション科



地域包括ケアシステムを担い地域を支える医療を目指す

小粒でもピリッとして機能的

広島県福山市の郊外にある医療法人社団 玄同会 こばたけ 小島病院（小島敬太郎病院長・111 床＝地域包括ケア病棟 52 床、医療療養病棟 59 床）は、福山市北部を中心に隣接の府中市までの 2 次医療圏をカバーする病院として「地域に望まれる理想の医療を目指して」を理念に医療業務に取り組んでいる。内科、脳神経内科、消化器内科（胃腸科）、循環器内科、呼吸器内科、糖尿病、外科、泌尿器科、眼科、リハビリテーション科の各科を診療科とし、診療科ごとに鮮明に得意分野として打ち出せる体制にしている。

また近年は、在宅医療や介護事業に力を注ぎ、訪問看護ステーション「こばたけ」、居宅介護支援事業所「こばたけ」、デイサービス「むべやま」、小規模多機能ホーム「ろか 芦花」、サービス付き高齢者向け住宅「芦花」など同院在宅事業部の管轄の施設として、きめ細かなサービス内容を用意して対応している。

同院では、内科、泌尿器科、外科、眼科においてはプライマリ・ケア（初期医療）に重点を置き、内科の中でも脳神経系、消化器系、循環器系、呼吸器系ではより専門的医療の提供に重点を置いている。

これが「得意分野を持って推進する医療」を目指した結果の同院診療科の編成である。

同院は、昭和 20 年（1945）に先代によって開設された医院にはじまる病院で、地域においてその存在感は自他共に認めるところだ。「当院は、小粒でもピリッとして機能的な病院を目指してきました」と小島病院長は語る。これについて、「患者さんが最もよい医療を受けられることができる機会を提供することを使命と考えているので、他の医療機関で検査や手術などを受けた方がよいと判断した場合は、患者さんのご希望を聞いた上で適切な医療機関を紹介することになっています」と続ける。

これはまさに地域医療推進に当たり地域包括ケアシステム運用の必要性が叫ばれる中、「患者さんが最もよい医療を受けることができる機会を提供することが使命」（小島病院長）と考え、プライマリ・ケアの大切さを認識した立ち位置の病院として、まさに地域医療において適切な機能分担を目指す“先兵”としての役割を果たしているように思える。

そのために院内で“座して待つ”のではなく、積極的に地域との関わりを持つべく外に出ていくことに努めている。例えば、芦花運営会議には、病院長、事務長、在宅事業部統括に加えて、町内会長、

利用者家族代表、地域包括支援センター職員等が集まって、お互いに報告や意見交換をしている。管轄の医師会の中では地域医療に関わる各種委員会の委員を引き受けたりしてきた。「当院では、介護保険が始まった頃から何年もかけてやってきたことで、その積み重ねで地域住民とのコミュニケーションが取れるようになったのです」と語るのは、自らが看護師で社会福祉士でもある佐藤千秋 地域医療部長（在宅事業部統括）だ。一方、地域の50カ所におよぶ近隣の医療機関にも2年に1回のローテーションであいさつ回りを行い、同院の機能についての説明を丹念に行っている。

また、年に3回のペースで、地域のケアマネジャーなど専門職対象や地域住民対象の地域講演会や出前講座なども平成25年（2013）から始めている。講演、講座の内容にもよるが、50～100人近い聴講者を集めていて、いまやすっかり地域に定着した感がある。

こうした活動によって地域に根差す病院として認知されることになっていくということだが、その手応えは紹介患者数が増えていることで立証済みだ。

大きな地域連携室の役回り

ここで具体的な地域医療推進の旗振り役の病

院として重要な役割を果たしているのが、同院の地域連携室だ。当然のことながら同院と周辺地域の医療機関や介護福祉施設との連携を図るための窓口となる部署で、他の医療機関からの紹介受付、転院受付、退院支援、医療福祉相談が柱となる業務だ。現在、専任の看護師と社会福祉士の4人が対応するが、同院ではここになり大きな権限を与えている。

地域医療連携に関する方針は、同院における専門が活かせる領域の患者や、在宅、施設で療養中の患者が急性増悪した場合などの紹介を受け、軽快すればまた元のかかりつけ医に診療を続けてもらえるようにする、いわゆる病診連携や病病連携を積極的に進めることにしている。

また、高次機能病院で手術後などの入院医療（ポストアキュート）を同院が担うという病病連携も行い、急性期・回復期リハビリ目的の患者には地域包括ケア病棟（4階）で、緩和ケアや療養が長引きそうな患者、神経難病患者には医療療養病棟（3階）を用意して、それぞれの患者にふさわしい医療を受けてもらうことにしている。

地域連携室における最近の紹介受付業務においては、病院長が専門の神経難病、高齢者の呼吸器、心疾患の患者が増加しているという。在宅や施設で緊急入院が必要と思われる患者は、主治医から直接同院の該当医師への連絡を促し、速やかな受け入れ回答を行うことを旨とし



正面玄関



外来待合室



総合受付・会計窓口



エントランス



患者さんが作った人形、院内のあちこちにある。



4F ナースステーション リハビリやソーシャルワーカーなども気軽に出入りして、ミーティングに見えるが日常的光景



各病棟の病室やナースステーションには、季節を感じるナース手作りの飾り付けが患者の心を癒している。



週1回のカンファレンスの様子 医師や看護師、コメディカル多職種が参加。入退院の患者について検討し、情報を共有する。



健康教室
栄養科スタッフによる栄養指導



医療相談室



地域連携室



事務部門

ていて、在宅・施設療養が安心して行えるように、在宅療養支援病院としての役割を果たしている（サブアキュート）。

転院受付業務では、高次機能病院からの回復期目的などの転院依頼を受け、リハビリ目的・在宅へのワンステップ入院などの相談に対応している。同院ではその際、医師、看護師、薬剤科、栄養科、リハビリテーション科、医療企画課、地域連携室の看護師、社会福祉士など院内の多職種が集まり、入念な打ち合わせによって方針が決められることになる。

これによって、急性期または引き続き亜急性

期の医療を必要とする患者、回復期を担うリハビリを必要とする患者、癌の疼痛管理や緩和ケアが必要な患者、神経難病患者、在宅や施設での療養が困難な患者が地域包括ケア病棟に入院することになる。

同院における地域包括ケア病棟の役割は、手術や急性疾患にも対応できる体制をとっている。いわゆる「地域急性期病棟」の機能を担っている。

退院支援業務については、退院後の在宅生活が不安でどうしたらよいか悩まされている人たちの相談窓口にもなっている。これについて



泌尿科 個々の患者に合ったオーダーメイドの医療を心がけている。



結石破砕室



薬剤科 右は薬剤調整室



眼科 眼底チェック等もできる設備があり、高齢の入院患者も安心。関係施設の往診にも対応



循環器内科小島廉平副院長（中央）の指導の下、看護師を対象に救命措置の訓練



リハビリテーション科



放射線科（左）・病棟回診 泌尿科における尿管ステント交換、嚥下造影検査等にも対応。NST では、嚥下造影を見ながら患者家族も交えて治療方針や食事内容等について話し合いを持つなど、職種垣根を越えて連携



特別室 入院中の患者さんは、スタッフの皆さんが明るくて心地良く安心です、と笑顔で。

は、地域のケアマネジャーと連携を図り、患者のアセスメントを行い、退院支援プランを協議する。退院前のカンファレンスでは、患者とその家族を中心に院内外の関連職種が集まって、退院後の在宅生活について話し合う。

退院前訪問指導では、リハビリ職員、看護師、社会福祉士、ケアマネジャー、福祉用具相談員などが、必要に応じて在宅訪問を行い、住環境の状況確認や指導を行う。退院後にも訪問指導が必要な患者を対象に看護師と社会福祉士が自宅や施設に訪問しモニタリングを行っている。

こうしてみると同院がいかに院内、地域共にチーム医療を重視しているかが分かる。「様々な活動を通じて日頃からコミュニケーション能力を培い、いろいろな問題に直面した時にみんなで考え解決していくことが大切だと思っています」と小島病院長は語るが、これはまさに今日の課題である地域包括ケアへの多職種連携を柱にしての貢献が前提の展開であり、地域密着型病院として地域になくてはならないオンリーワンの病院を作っていこうという意気込みの表れでもある。この成果が一層期待されるところだ。

各専門科の特徴づけにも力を注ぐ

とはいえ、「小粒でもピリッとした病院」であるために、はっきりとした特徴づけが重要だということで、昨年11月、第一病棟をそれまでの一般病棟入院基本料10対1算定病棟から地域包括ケア病棟算定病棟に移行した。

ここではサブアキュート機能として、急性期疾患や慢性疾患の急性増悪などで治療が必要な患者の受け入れを行い、それぞれの状態に応じ、医師、看護師、リハビリスタッフ、社会福祉士などの多職種が協働し、安心して退院できるようサポートを行っている。ここからは前述の地域連携室の差配によるところが大きい。

一方で、各専門科でも同院ならではの特徴を打ち出すことに努めている。例えば、主に排尿障害、尿路結石、尿路感染症や尿路性器の腫瘍



5F サンプルーム
周辺に高い建物がないので、近隣の人たちの洒落た憩いの場にもなっている。

の診断、治療を行う泌尿器科では、ESWLをこの地域で初めて導入し、結石治療の先鞭をつけた。さらに、悪性腫瘍では腎尿管の腫瘍の場合、後腹膜鏡を用いた手術を行うなど、泌尿器科に関してはほぼ院内完結という特徴を持つ。

リハビリテーション科も、特にパーキンソン病などの神経難病疾患のリハビリに力を入れているが、比較的軽症の患者を対象とした「パーキンソン病体操クラブ」による進行予防を目的とした集団体操に取り組むといった試みや、ここでも地域包括ケアシステムの一部を担うため自治体や地域住民から依頼を受けて、地域への体操指導、出前講座などに対応している。その先に目指すものは「閉じこもりゼロの活気ある地域づくり」である。

同院の一貫したこだわりは、地域包括ケアシステムを担い、関連諸機関と協働して地域を支える医療を推進することにある。その基には、地域のニーズに対応して変化できる実力と柔軟性、各自が当事者意識を持ちながら、院内では多職種連携、院外では顔の見える連携によって共に取り組む姿勢がある。「小粒でも、」と小島病院長は口にするが、既に地域住民の大きな支えとなり、継続的な安心を提供している同院は、病院全体でプライマリ・ケアを実践していると言える。